

宗岡二中だより 7月号



令和5年7月1日

自ら学び考える生徒

学校教育目標：心豊かな優しい生徒

明るく元気な生徒

あいまいさ耐性

校長 伊藤大輔

先日スーパーで買い物中に、お母さんと5歳くらいの男の子による会話が聞こえてきました。

母：「桃とブドウどっちがいい？」

子：「わかんない。」

母：「うどんとそば、どっちにする？」

子：「うーん・・・どっちでもいい。」 母：(ためいき)

私も幼いころ、どちらか一方に決めることが苦手でした。優柔不断な性格だから仕方ない、と親はあきらめていたようです。

学校の勉強でも、先生から説明を受けても、引っ掛かると、くよくよ思い悩みました。中学2年生1学期のある日、英語の授業で、willとbe going toを習いました。どちらも未来を表す「未来時制」だと教わりました。時制とは時間のことだと習いました。そこで、この言い回しにモヤモヤしました。今日の午後のことだろうが、明日のことだろうが、20年後のことだろうが、「今」予測したり予定を立てるのに、「未来時制」って何だ？混乱しました。結局willもbe going toも「未来を表す形、そういうものなのだ」と自分に言い聞かせ、無理やり納得しました。しかし、未来時制という言葉に対する違和感はぬぐえませんでした。

時は流れて、高校1年生の1学期。英文法の授業で、先生が「文法用語をいくらたくさん覚えても、英語は使えるようにならん！応用が利く良質な英文を教えるから、とにかく正しい発音で、ひたすら音読して頭の中に叩き込め！」と一喝したので。その迫力に、おののきつつ、その先生に数年来の疑問を恐る恐るぶつけました。開口一番「未来時制なんて言い方忘れろ！けど、面白いことに気付いたな。ここに理屈が書いてある。」と言って、薄くて青い参考書を貸してくださいました。確かに答えが書いてありました。答えを発見したとき、「調べるって面白いなあ」と心から思いました。その後、ことばの不思議にのめり込むきっかけになりました。

さらに時は流れて、英語教師になって10数年たった頃、外国語を習得する仕組を勉強する機会に恵まれました。そのとき、あいまいな状態に耐えられる力、つまり、どっちつかずで答えが出ない状態でも、不安に振り回されず、落ち着いて対応する力が

言語習得の鍵だと知りました。「わからないこと」や「うまくいかないこと」があっても、いったん保留する態度と言い換えてもよいでしょう。心理学用語で「あいまいさ耐性 (Ambiguity Tolerance)」と言います。心理学者のElse Frenkel-Brunswik(1908-1958)が定義したこの概念は、言語の習得に限らず、学習全般に影響があると考えられています。

もうすぐ、みなさんは夏季休業日を迎えます。普段よりも自分に向き合う時間も増えるはずですが。その時間を、1学期やそれ以前に学んだことの振り返りに割いてみてはいかがでしょうか。そのとき、引っ掛かりや素朴な疑問がないか点検してみてください。もし見つかったら、記録しましょう。できたら、解決は急がないで、一旦保留しましょう。一晩寝たら自力で解決できるかもしれない。もしかしたら、解決不可能な難問かもしれない。たとえネットで調べて解答を得たとしても、鵜呑みにしてはいけません。もしかしたら、別の解釈があるかもしれない。解決を急がずに、自分で立てた問いと向き合うのです。

とは言え、勉強や仕事で難しい局面を迎えたときに、回答・判断等を保留する選択は、ときに勇気が必要です。自分の心にブレーキをかける行為だからです。加えて、結論を急かされる場面にあっては、他者から無言のプレッシャーも受けます。

世の中が、効率を重視して、「最速、最短、断定」を追い求めると、どっちつかずで保留する状態に耐えられなくなる人もいます。賛否ある生成AIの拡充なども、こうした社会の在り方が影響を与えているのかもしれない。

かくいう私も、あいまいさに耐える力に衰えを感じます。「すぐ答えを知りたい」「白黒ははっきりさせたい」「正しいのか間違っているのか、判断を急ぎたい」こうした思いが心をよぎる場面が増えました。厄介に思える問題であればあるほど、早く片づけたいと心がざわつくのです。こうした場面でも、保留が功を奏することが多いのに。大切なことは、心のざわつきを自覚し、調整することだと思っています。

自ら問いを立て、立てた問いを最速最短で解決するのではなく、さらに良いものにする。夏休みを使って、そんな探究の芽を育ててみませんか？